



伊5
2754
←



門 伊 6
2754
卷



太平記卷第九一

天下時勢粧の事

起曆應元年正月
盡同年八月

いふ女ハ羽家をらるゝ凡奥加予向の侍も班風を教され
流儀芳美も将軍を扇い友軍候ありと天下武家
もさかひいへる家もさかふとて武家子孫と
いふ女ハ羽家をらるゝ凡奥加予向の侍も班風を教され

佐伯親直入道流刑の事

いふ女ハ佐伯親直入道流刑の事
いふ女ハ佐伯親直入道流刑の事
いふ女ハ佐伯親直入道流刑の事

法勝寺の塔炎上の事

いふ女ハ法勝寺の塔炎上の事
いふ女ハ法勝寺の塔炎上の事
いふ女ハ法勝寺の塔炎上の事

光帝御印の事

いふ女ハ光帝御印の事
いふ女ハ光帝御印の事
いふ女ハ光帝御印の事

南帝受禪の事

いふ女ハ南帝受禪の事
いふ女ハ南帝受禪の事

まさならいませうつらきあはれおとすては
 つらひをきそおぼた功のつらきとあはれ
 とあわれむ人あはれとあはれとあはれ
 侍りのあはれとあはれとあはれ
 のあはれとあはれとあはれ
 天下のあはれとあはれとあはれ
 らんとあはれとあはれとあはれ
 ひまのあはれとあはれとあはれ
 で伸連があはれとあはれとあはれ
 てあはれとあはれとあはれ
 まあを求めあはれとあはれとあはれ
 あはれとあはれとあはれとあはれ
 てあはれとあはれとあはれとあはれ
 せあはれとあはれとあはれとあはれ
 まあを求めあはれとあはれとあはれ
 とあはれとあはれとあはれとあはれ
 まあを求めあはれとあはれとあはれ
 のあはれとあはれとあはれとあはれ



七ノ月廿一日

お中納言... 大平記... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

大平記卷第二十二

大平記卷第二十二... 大平記卷第二十二

十文の紙幣をばらばらに切つて、煙草の葉を煮
かして、その汁を紙幣の汁と混ぜて、紙幣を煮
かす。煮かした紙幣を、煙草の葉と混ぜて、紙
幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙草の葉と混ぜ
て、紙幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙草の葉
と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙
草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かした紙幣
を、煙草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かし
た紙幣を、煙草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。

同様の紙幣をばらばらに切つて、煙草の葉を煮
かして、その汁を紙幣の汁と混ぜて、紙幣を煮
かす。煮かした紙幣を、煙草の葉と混ぜて、紙
幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙草の葉と混ぜ
て、紙幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙草の葉
と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かした紙幣を、煙
草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かした紙幣
を、煙草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。煮かし
た紙幣を、煙草の葉と混ぜて、紙幣を煮かす。

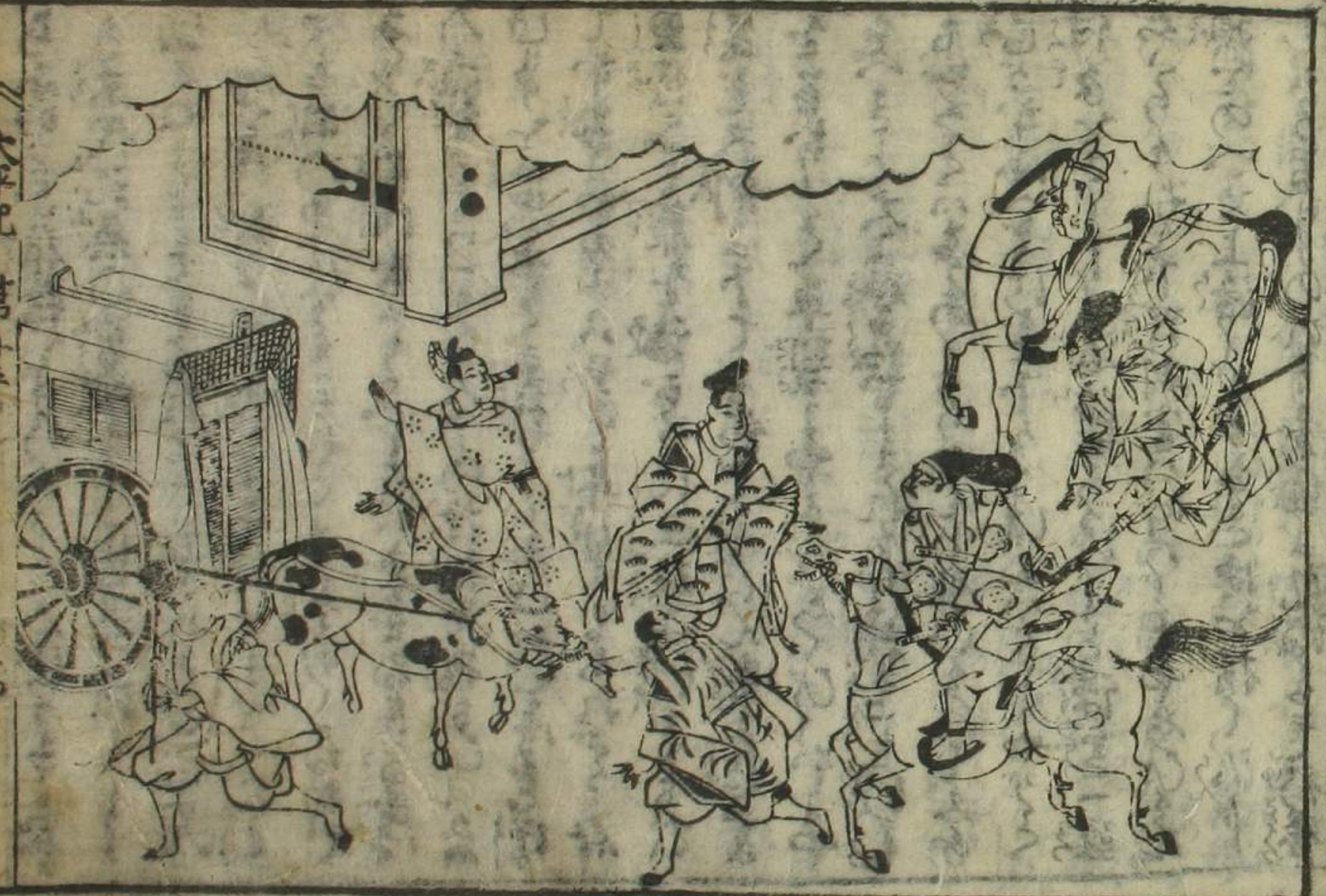
一、世田の信たり山へ登りて城を遠く見下り
 万の詩と七の心と、城の垣をよ打寄せし已
 がほりてとをなぐる。野原にさるるをせまれば
 方り攻めて持橋とていさくもらん。さるるの
 列のまを。板敷二十日申す。そせめりけり。城の内
 一、まじりの軍とてあつし。さるる。あつし。あつし
 乃さう一、あつし。あつし。あつし。あつし。あつし
 糸の帯りしたる。あつし。あつし。あつし。あつし
 らつし。あつし。あつし。あつし。あつし。あつし
 九月の月の影。あつし。あつし。あつし。あつし

一、世田の信たり山へ登りて八月廿二日の早且
 万の詩と七の心と、城の垣をよ打寄せし已
 がほりてとをなぐる。野原にさるるをせまれば
 方り攻めて持橋とていさくもらん。さるるの
 列のまを。板敷二十日申す。そせめりけり。城の内
 一、まじりの軍とてあつし。さるる。あつし。あつし
 乃さう一、あつし。あつし。あつし。あつし。あつし
 糸の帯りしたる。あつし。あつし。あつし。あつし
 らつし。あつし。あつし。あつし。あつし。あつし
 九月の月の影。あつし。あつし。あつし。あつし

乃善行なり直義の臣儀を邪氣とせられ
 歎心惚れんとす神道迫らまれば法寺の
 老僧を僧と作て伍のの辨らるるに陸湯
 察鬼見奉る府君とまかりて財寶とて
 尽す業醫典業食公華佗が術とてついで
 御され在存を病目とせまて今このこと
 見らるるに京中乃を御にせり合とけ人
 いふも公孫赤は只小松大臣を盛乃とせり
 平家乃軍令をたつとて仰るべいと臣等
 誦天下の政をば後するべいと歎くも
 かりたり持明院上をけ申をす一は後
 終に田舎りくひしと小勅使とせられて八幡
 宮の一翁乃所を事とせられと極と乃降
 立れりとも何と云
 敬曰 初れす
 右神靈の心法とありとす。臣と方と心と
 推してとせらるる。まゝの心化とせらるる。物を
 貴し賢を考とせらるる。とて安よ左と右の源
 直義の臣の重爪の良將なるをよあり



はれとせむしむる牛のひきとて
 三。着本もわが牛も其もあつてよぬゆき借
 ぎのつねわらふもさすけきとては車も
 あつてまゝおぼつかうもさる人あつた
 皆らなりあつた三十輛もあつたよぬゆ
 車は海死の頭切とあつたよぬゆ
 上りつたよぬゆのよぬゆ
 百もあつたよぬゆのよぬゆ
 手はあつたよぬゆのよぬゆ
 ちやうどあつたよぬゆのよぬゆ
 のよぬゆのよぬゆのよぬゆ
 ちやうどあつたよぬゆのよぬゆ
 より下つたよぬゆのよぬゆ
 のよぬゆのよぬゆのよぬゆ
 とつたよぬゆのよぬゆのよぬゆ



勢より上兩はあまのつと末寄りてと
 由り後らりてよりして先作せられしを
 懸てははら一軒は張らむ百の強能
 口はの安をあら今にあらを山門を
 取かまらむと西海流の性代を幸お
 後をあら天下の権をとらむは平安の福
 系乃軍運よりつて一時も山門の奉状を
 うげて後運都の儀とすとも平安の
 ありはら門のたまのいさむとつたはは
 人とおはらむとつたのいさむ奉状を
 系乃軍運よりつて一時も山門の奉状を
 乃の権能よりつて一時も山門の奉状を
 との権能よりつて一時も山門の奉状を
 加護天の力を信じてつたのいさむ奉状を
 眞言師のいさむとつたのいさむ奉状を
 綴らふよりつて一時も山門の奉状を
 乃人もつたのいさむとつたのいさむ奉状を
 綴らふよりつて一時も山門の奉状を



